

雜感

文學士 多田鐵雄

詩二つ

虚偽ミ欺瞞だらけな世界を逃れて
子供の世界を覗く私

陣取のジャンケンの大將で

一度も負けずに威張つてゐる子

そのキュービーのやうな可愛い顔は

ほんまに

清い天國を想はせるのに

五度のジャンケンのあまの二三度は

かすかなアトダシで巧妙に勝つてしまふ

機微な瞬間の鋭い瞞者よ

しかもこの子こそ

その世界の支配者ではないか

x

是非を云はせず

強い者の勝ちなり

その腕白の大將は

子供の群の大半を

陣取遊びに狩集めてしまひ

負けて残された二人は

ひそひそ語り合つてゐるが

二人で肩をくんで

「かくれんぼするもの寄つていりて」

先刻から砂いぢりに餘念ない四五人や
手をつなぎ合つて日向ぼっこしてゐる

氣の弱そうな女の子達の間を

叫んで歩くが

笛ふけさ踊らす

陣取が初まり

大勢飛び走る中を

みぎひだり見かへりつ

呼び聲を高め

むなしくいたづらに

さそひ歩く

いぢめられたその二人

○

一月から二月にかけて、あちこちで付屬小學校の入學試

験が行はれた。幼ない頑是ない子供に試験地獄の苦痛を與

へるこゝは忍び難いこゝであるが、社會の建前からして試

験制度の存在は當然のこゝであつて、無邪氣な子供を試験

地獄のどん底へ突落すものは、制度自體でなく、むしろ無

智な大人であると思ふ。

或る母親は私のこゝろへ來て斯う云ふ。

「宅の子供はさうしても〇〇師範の付屬へ入るさ申すのです。近所の小學校なんか百姓の子供ばかりでいやだ、僕一生懸命やつて試験うけるよ、さ申すのです。」

私は、この子供のださ云ふ言葉を母親の言葉ださして心の中で奇麗さつぱり返上しながら、平素から氣付いてゐたその子供の色々な點を擧げて付屬の試験を受けるこゝの非を説いた。そして云ふつもりでなかつたけれど、親の虚榮、さ云ふ言葉を口にしてしまつた。

或る母親はいくらその子供が他の一般の子供より、凡ゆる發育の點で半年以上も後れてゐるさ云ふこゝを私が説明しても、合點せず。

「先生の前では恥かしがらるからでございませうか。自宅で私が致しますさ何でも出來ますので。」

さ主張するので、仕方なく私はその子供を呼んで、數種のテストを母親の前でやらせた。初めは、メンタルテスト遊び、さ云ふ幼年雜誌の臨時増刊になつて出てゐるものをやらした。その母親が自宅で繰り返しやつてゐるものはこれ

らしい。覚え込んでしまつてゐるから出来るはずだ。次に幾つかの小さい三角の板を並べ、合せて一つの大きい四角を作らせた。私は子供がその板をいぢつてゐる間、その母親に説明した。

「これら子供が並べるに就いて、略々三通りありまして、一番よく判つてゐる子供は、初めに大體の見當をつけながら形を作つて行きます。二番目のは、たゞ偶然に出来るのを期待しながら並べてゐるのですが、一度並べて不可能だつたこゝは記憶しながら作つて行きます。三番目のはたゞでたらめに組合せて見てゐるだけです」。

その子供は、第三番の流儀で板をいぢつてゐた。そして、私の方を見たり、母親の方を見たりして、無邪氣に笑つてゐる。私はこれで母親も合點が行つただらうと思つたこゝろ、母親は

「ああ、笑はないで、よやく、落付いて考へてごらん」。

こ子供に云ふのであつた。

高等師範の付屬小學校を受けた一人の男の子が私の處へ來て、

「先生、僕のこゝろへは未だ手紙來ないのよ。明日までには來るかも知れないね」。

こ云つた。合格した他の子供のこゝろへは三四日前に既に通知狀が配達されてゐた。私はこの程度の子供の失望は仕方あるまいこは思つたが知らず知らず験の裏の熱くなるのを覺えた。

○

井上前藏相を仆した某は、學問もなく思想も淺薄で何等定見なくあつた行爲に出たのみならず、取調べの係官が少しく複雑な問を發するこ、何も答へ得なかつた程だこ云ふが、この事件に對する安部磯雄氏の「井上氏の死に就いては、井上氏を國賊のやうに云つた人達に一部の責任がある」こ云ふ言葉は、正に至言であるこ同時に、それは子供に關心のない大人の社會に對する警告こも考へられ、幼児教育に當る者に大きな問題を更めて提示してゐるこ思はれる。

○

「兎の足は何本ありますか、狸の足は何本ありますか」。

こ子供に尋ねるこ、その中の幾人かは必ず、足は二本で、手が二本こ答へる。即ち四本こ答へる子供は現實的な見方に立つてゐるに對し、足が二本、手が二本こ答へる子供は僞人的な見方に立つてゐる。子供が未だ僞人的な見方より外には考へられない間はこもかく、現實的な見方が可能になつて來た場合には、或程度まで、後者の見方によつて僞人的な見方を批判させておく必要があるまいかこ考へられる。なぜならば多くの童話や口繪の中に、不必要なほご幼稚な子供の僞人的な見方に迎合し、それが子供の現實的

な見方の發達を妨害してゐるやうに見受けられるものが往々あるからである。そして僞人的な見方はこもすれば誤まつた知識こなつて頭に残り、そうした誤つた知識が氣付かれず、いつまでも矯正されず、何かの折にふこ、錯覺こなつて現れ、困るここは人々のよく經驗するここである。されば童話や口繪のそれ自體の吟味は勿論のここ、それを子供に與へる場合の扱ひ方は、随分こ難かしくもあり又、重要なここでもあるこ思はれる。(三)

子供の言葉をどう聞くか

東京市大和郷幼稚園 坂 内 こ ツ

——先生○さんがいざめるんです

いぢめるこいふ言葉を幼児の世界から取り去り度いこ希つて居る私は聞く度にぞつこする、されこよく考へて見ると子供のいぢめるこいふのは大人が思うやうに故意に

するこか惡意を以てするこかこいふ意味ではなく、冗談に手をふり上げた事も無邪氣にカラカッタ事も少しく自分の氣にくはぬ事をされるこ、一口にいぢめられたこいふのだから、神經を尖らせて嫌がつて居るにも當らないこ思ひ直